

日本英文学会東北支部 第70回大会資料

時：2015年11月7日(土)・8日(日)

所：宮城学院女子大学
(仙台市青葉区桜ヶ丘9-1-1)

日本英文学会東北支部事務局

(〒980-8511 仙台市青葉区土樋一丁目3-1 東北学院大学英語英文学研究所内)
電話：022-264-6401／ファクス：022-264-6530

第70回大会懇親会のご案内

第70回大会懇親会を以下のように開催致します。詳細および申し込みについては、10月に支部会員宛に別送する案内をご覧ください。また、学会会場から懇親会場へ、懇親会場から地下鉄泉中央駅へ無料バスが出ます。どうぞ懇親会にもご参加下さい。

【日時】 2015年11月7日(土) 午後5時30分～7時30分

【場所】 仙台ロイヤルパークホテル
(仙台市泉区寺岡6-2-1)

日 本 英 文 学 会 東 北 支 部

2015年度 大会役員一覧

(敬称略・五十音順)

支 部 長	箭川 修				
副 支 部 長	大河内 昌				
理 事	飯田 清志	石橋 敬太郎	岩田 美喜	宇津 まり子	
	遠藤 健一	奥野 浩子	金子 義明	川田 潤	
	佐々木 和貴	鈴木 亨	鈴木 雅之	村上 東	
大会準備委員	梶 理和子	竹森 徹士	野口 元康	山田 恵	
	佐藤 元樹	長野 明子			
開催校委員	鈴木 雅之				
事 務 局	福士 航(事務局長)		井出 達郎(事務局員)		

日本英文学会東北支部第70回大会プログラム

時：2015年11月7日(土)・8日(日)

所：宮城学院女子大学 (仙台市青葉区桜ヶ丘9-1-1)

第一日 11月7日(土)

理事会 10時30分より(C409)

開会式 13時より(C203)

□開会の辞

日本英文学会東北支部長 箭 川 修

特別講演 13時20分～14時20分(C203)

「歴史小説について」

司会 山形大学教授 中 村 隆
京都大学教授 佐々木 徹

研究発表 第1発表 14:30 - 15:05 第2発表 15:10 - 15:45
第3発表 15:50 - 16:25

第一室 (C407)

司会 山形県立保健医療大学准教授 梶 理和子

1. ジェーン・オースティン作品の演劇性
——『高慢と偏見』における絵画と演劇の表象

東北生活文化大学短期大学部准教授 佐 藤 恵

司会 弘前大学名誉教授 村 田 俊 一

2. イーヴリン・ウォーとジャーナリズム

山形大学講師 三 枝 和 彦

第二室 (C406)

司会 秋田大学教授 村 上 東

1. Narcissa Benbow Sartoris の女性像
——“There Was a Queen”と *Sanctuary* を中心に

東京都立産業技術高等専門学校准教授 海 上 順 代

司会 岩手大学教授 齋 藤 博 次

2. ナボコフ『プリム』における『ハムレット』的主題

東北大学大学院 深 澤 明 利

3. ナショナリズム、西部劇、ロバート・オルトマン

秋田大学教授 村 上 東

第三室 (C405)

司会 流通経済大学講師 野 口 元 康

1. カポーティの出发点——風俗小説としての『サマー・クロッシング』

東北大学大学院国際文化研究科専門研究員 藤 倉 ひとみ

	司会 宮城学院女子大学 (非)	清 水 菜 穂
2. 南北戦争以前の奴隷物語の発展について —— <i>Narrative of the Life of Frederick Douglass</i> (1845年)を中心に	弘前大学人文学部准教授	堀 智 弘
3. “Bartleby”における「分身」と「死んだ手紙」	北海道大学大学院	鈴 木 一 生

第四室 (C404)

	司会 東北学院大学 (非)	阿 部 潤
1. Deriving Specificity Effects in the Labeling Theory: A Case Study of Labelability and Extractability	東洋大学助教	後 藤 亘
2. Fragment Answerにおける再構築効果の非対称性	東北大学大学院	井 形 優
3. 英語の空所化について：転送操作の視点から	旭川医科大学講師	戸 塚 将

第五室 (C402)

	司会 東北大学准教授	長 野 明 子
1. 日本語の「嘘」と英語の lie の意味構造の比較分析 —— Natural Semantic Metalanguage を用いて	東北大学国際文化研究科専門研究員	斎 藤 珠 代
2. 派生名詞句の内部構造について	東北大学大学院	佐 藤 亮 輔

第二日 11月8日 (日)

SYMPOsia (10:00 – 13:00)

第一部門 (C407)

英文学と英語・文化・文学教育を考える

司会・講師	宮城教育大学准教授	竹 森 徹 士
講師	仙台高等専門学校教授	久保田 佳 克
講師	秋田大学准教授	大 西 洋 一
講師	東北大学教授	大河内 昌

第二部門 (C405)

ヒッピー世代の諸先輩 —— Thoreau, Hemingway, Miller

司会	秋田大学教授	村 上 東
講師	大東文化大学教授	中 垣 恒太郎
講師	共愛学園前橋国際大学教授	大 森 昭 生
講師	東北学院大学准教授	井 出 達 郎

第三部門 (C402)

言語計算の効率性を巡って

司会・講師	東京理科大学講師	北 田 伸 一
講師	東京理科大学准教授	小 畑 美 貴
講師	北見工業大学准教授	戸 澤 隆 広
講師	北海道教育大学旭川校准教授	菅 野 悟
講師	福島大学講師	佐 藤 元 樹

＜第一日＞

11月7日(土)14時30分

研 究 発 表

第一室 (C407)

司会 山形県立保健医療大学准教授 梶 理和子

ジェーン・オースティン作品の演劇性——『高慢と偏見』における絵画と演劇の表象

東北生活文化大学短期大学部准教授 佐 藤 恵

ジェーン・オースティン(1775-1817)作品の演劇性、特にその喜劇性については、従来からシェイクスピアをはじめ、王政復古劇や18世紀演劇との関連性が指摘されてきたが、ここでは『高慢と偏見』における演劇の表象が作品全体の構造とどう関わっているかを分析し、絵画と演劇の表象が密接に結びついていることを見ていきたい。また、その際に当時女優たちの多くの肖像画を描いたサー・ジョシュア・レノルズ(1723-93)と、『高慢と偏見』を読んで高く評価したR. B. シェリダン(1751-1816)の劇との関連性を探りながら考察する。エリザベス・ベネットは、オースティン作品の中で一番の活動的な力を与えられたヒロインであり、その機敏さ、活発さが強調されている。絵画と演劇の表象分析によって最終的に浮かび上がってくるのは、静止した絵に収まりきらないエリザベスの動的な、演劇的な魅力なのではないだろうか。

司会 弘前大学名誉教授 村 田 俊 一

イーヴリン・ウォーとジャーナリズム

山形大学講師 三 枝 和 彦

イーヴリン・ウォー(Evelyn Waugh 1903-66)の第5作目の長編小説『スクープ』(Scoop 1938)は、第二次エチオピア戦争(1935-36)の勃発直前、デイリー・テレグラフ紙によって戦地特派員として派遣されたウォーが、現地での体験をもとに書き上げた作品だ。処女作である『衰退と滅亡』(Decline and Fall 1928)を彷彿とさせる物語の中で、当時のジャーナリズムの手法と体質が、毒とウィットのある筆致によって茶化しのめされている。痛快な活劇に仕込まれたジャーナリズムの諷刺には、戦地特派員として活躍するどころか軽んじられたウォーの恨みがにじみ出ていると言って差し支えないようだ。しかしこの点にはもう少し注意深い目を向ける必要があるだろう。本発表では、『スクープ』におけるジャーナリズムの取り扱いを再検討することによって、ジャーナリズムに対するウォーの姿勢を考察する。

第二室 (C406)

司会 秋田大学教授 村 上 東

Narcissa Benbow Sartoris の女性像——“There Was a Queen”と *Sanctuary* を中心に

東京都立産業技術高等専門学校准教授 海 上 順 代

William Faulkner の作品の多くの女性登場人物の中でも、「南部淑女」であることに固執し、実際に「南部淑女」にふさわしい社会的地位を維持し続けた特異な存在である Narcissa Benbow Sartoris の女性像を再検討する。*Absalom, Absalom!* の一節にある様に、Faulkner の世界では女性は男性の基準で「結婚相手」「娼婦」「性交渉をする相手」と厳密に区別される。この一種のカースト制度の「頂点」に位置する「結婚相手」となる淑女である Narcissa は、弁護士 Horace を兄に持ち、名家 Sartoris 家の Bayard の後妻となる。その後、Bayard が死去しても再婚することなく、Sartoris 家の未亡人として Bayard の間にできた子と Sartoris 家で暮らし続ける。表面的には問題もなく、女性として最高とも言える社会的地位にいる女性に思われるが、Narcissa がこうした立場を保持するために、他人だけでなく身内そして自分にとっても過酷な「賭け」に挑んできた点を取り上げたい。今回は“*There Was a Queen*”と *Sanctuary* を中心的なテキストとし、家父長制度の中で「勝者」となる Narcissa の女性像の再検討を試みた。

司会 岩手大学教授 齋 藤 博 次

ナボコフ『プニン』における『ハムレット』的主題

東北大学大学院 深 澤 明 利

ロシアに生まれ、やがてアメリカに亡命することになる多言語作家ウラジーミル・ナボコフ (1899-1977) は、アメリカ文学史上において「ポストモダニズム」の項に分類されるのがほとんど習わしになっている。すなわち、先行作品を模倣するパロディをはじめとした言語的な技巧と戯れるばかりで、もはや「現実描写」を志向しない作家であると見なされているのである。本発表では、ナボコフの『プニン』(1957) におけるウィリアム・シェイクスピアの『ハムレット』(1602頃) 的主題を探ってみたい。両作品にはプロット上の類似性がそこに見受けられるにもかかわらず、そうした類似性についてほとんど論じられてはいないからである。そのうえで、『プニン』における亡命ロシア人の歴史的な経験の「現実描写」を指摘することができれば、ポストモダニストとしてのナボコフ像を再考する本発表の目標は達成されることになる。

ナショナリズム、西部劇、ロバート・オルトマン

秋田大学教授 村 上 東

Robert Altman 監督作品には2篇の西部劇がある。*McCabe and Mrs. Miller* (1971) は、Bret Harte から *Little House on the Prairie* まで受け継がれた西部のほぼ神話的な世界が合州国全土が開拓し尽されることで消えてゆくのではなく、大企業の進出で踏みつぶされるさまを描いている。*Buffalo Bill*

and the Indians, or Sitting Bull's History Lesson (1976) では、西部劇の原型となった見世物を正体見たり枯れ尾花風に取りあげ、徹底的な偶像破壊が行われる。

社会全般に浸透しているという点では、いわゆる純文学よりも娯楽作品、活字よりも映像が持っている影響力のほうが大きかろう。その点で西部劇は文化ナショナリズムの中心にあるジャンルと言えようか。監督はその西部劇を、大資本の暴力によって滅びたもの、いや、はじめから造りものの世界であった、としているのである。今回は、文化ナショナリズムと西部劇の問題から Altman 作品を振りかえってみたい。

同時代の映画作品に *Junior Bonner* (1972) や *The Electric Horseman* (1979) といった、見世物としても落ち目だったロデオの状況を逆手にとり、西部劇の精神的な継承を訴えたものがあったことも考慮したい。

第三室 (C405)

司会 流通経済大学講師 野口元康

カポーティの出发点——風俗小説としての『サマー・クロッシング』

東北大学国際文化研究科専門研究員 藤倉ひとみ

トルーマン・カポーティ (Truman Capote, 1924-84) は、処女長編とされている『遠い声、遠い部屋』(*Other Voices, Other Rooms*, 1948) の発表以前に、『サマー・クロッシング』(*Summer Crossing*, 2006 年死後出版) という作品を書いている。『サマー・クロッシング』はこれまで、習作として論じられることが多く、この作品の中に見られる主題、象徴、人物造型、舞台設定などがカポーティの後の作品にいかに反映され、継承されているのかという観点から考察されることが圧倒的に多い。本発表では、『サマー・クロッシング』が若書きの単なる習作ではなく、当時のニューヨークの都市風景を活写した風俗小説 (novel of manners) であるということを具体的に分析してみたい。次いで、『サマー・クロッシング』におけるカポーティの創作意図を探ってみたい。

司会 宮城学院女子大学(非) 清水菜穂

南北戦争以前の奴隷物語の発展について ——*Narrative of the Life of Frederick Douglass* (1845 年) を中心に

弘前大学准教授 堀智弘

奴隷物語 (slave narrative) と呼ばれる、逃亡奴隷が自らの経験を語った一連のテキストは、長らく、奴隷制の内情を知るための歴史的資料として限定的な価値しか認められてこなかったが、近年、アメリカ社会の変動と密接に連動した文化的テキストとして再評価が盛んに行われつつある。80 年代から現在に至るまで、奴隷物語のアンソロジー、論文集や研究書がいくつも出版されるとともに、長らく失われていた、もしくは顧みられることのなかった奴隷物語が研究者によって発掘されて新

たな序文付きで再出版されるケースも数多くみられるようになっている。

本発表では、奴隷物語ジャンルの発展においてひとつの決定的な分水嶺ともなっている *Narrative of the Life of Frederick Douglass* (1845 年) を取り上げ、特にダグラスが宗教や神に対してもっていた微妙な距離感を分析するとともに、彼が『物語』において改宗物語という慣習的な物語形式をいかに換骨奪胎し、現世的な自由追及の物語へと巧みに書き換えたのかを明らかにしてみたい。

“Bartleby”における「分身」と「死んだ手紙」

北海道大学大学院 鈴木 一 生

手紙を書くということは、手紙を「書かないことができる」という可能性の放棄を伴う。「書くことができる」、あるいは「書かないことができる」のどちらかは必ず真とはならないのであり、手紙は常に「死んだ手紙」である——このように、Herman Melville (1819-91) の短篇“Bartleby, The Scrivener: A Story of Wall-Street” (1853) を、Giorgio Agamben は潜勢力と現勢力の概念から読んでいる。この「することもしないこともできる」という可能性は、*Moby-Dick* (1851) において既に描かれており、“Bartleby”でも同じ主題が探求されていた。*Moby-Dick* 第47章で、ボートのマットづくりから語られていた偶然、必然、自由意志が、“Bartleby”においては「分身」のモチーフから語られるのである。分身については先行研究において度々指摘されてきたことであるが、当発表では、ここに Agamben による解釈を適用し、分身が潜勢力・現勢力、あるいは意識・無意識のかたちを描き出しているのだということを示してゆきたい。

第四室 (C404)

司会 東北学院大学(非) 阿 部 潤

Deriving Specificity Effects in the Labeling Theory: A Case Study of Labelability and Extractability

東洋大学助教 後 藤 亘

Goto (2015) は、Chomsky (2013, 2014) の labeling 理論を採用し、(1) の一般化を提案した。

(1) α is an unlabeled $\{\text{XP}, \text{YP}\}$ structure and the unlabeled structure is opaque for extraction.

本発表では、(2)の *Specific Condition* は、(1)の一般化のもとで捉えられると主張する。

(2) a. Who_i did you see [a picture of *t_i*]?

b. *Who_i did you see [the picture of *t_i*]?

具体的には、(2a)でWh句の抽出が許されるは、名詞句がtransparentなlabeled {D, NP}構造を形成しているからであるのに対して、(2b)でWh句の抽出が許されないのは、名詞句がopaqueなunlabeled {OP, DP}構造を形成しているからだと論じる。

Fragment Answerにおける再構築効果の非対称性

東北大学大学院 井 形 優

Fragment Answer (Fragment) において、DP Fragmentは再構築効果を示すが、PP Fragmentは示さないという違いが見られる。本論は、この違いを二つの仮定に基づき説明する。まず、Wholesale Late Merger (WLM) に従い、制限子は格フィルターに違反しない限り、できるだけ反循環的に演算子と併合すると仮定する。次に、Fragmentは焦点演算子と制限子から成り、DP/PPがDP/PP Fragmentの制限子となると仮定する。格を持つDP制限子の場合、WLMが阻止され、格位置で併合される。その結果、格位置にDP制限子のコピーが残り、再構築効果が生じる。他方、格を持たないPP制限子の場合、WLMが適用され、反循環的に演算子と併合される。その結果、基底位置の演算子は制限子を伴わず、再構築効果は生じない。このように、再構築効果の非対称性は二つの仮定から説明される。

英語の空所化について：転送操作の視点から

旭川医科大学講師 戸 塚 将

Jayaseelan (1990) は重名詞句移動 (HNPS) による空所化の分析を提案し、削除現象が移動操作によって引き起こされることを提案した。しかし、この分析にはJayaseelan自身が挙げているが、なぜ埋め込み節での空所化が不可能であるかという問題が生じる。本発表ではJayaseelan (1990) の分析に対して批判的検討を行い、この分析よりもChomsky (2000) 以降のフェイズ・モデルでの転送操作による分析がより妥当な分析であることを論じる。具体的には、主節の派生が最上位のCPまで進んだ際に起こる転送操作により、フェイズの端にある主要部と指定部が転送されないことが空所化を派生させること、そして、主節でしか空所化が起きないことがこの転送操作の特性によることを論ずる。さらに、本提案が正しい限り、主節の文頭に起こる省略現象にも同様の説明が与えられることを示す。

 第五室 (C402)

司会 東北大学准教授 長 野 明 子

 日本語の「嘘」と英語のlieの意味構造の比較分析
 ——Natural Semantic Metalanguageを用いて

東北大学国際文化研究科専門研究員 斎 藤 珠 代

Wierzbicka (1996, 1997) は、他言語に翻訳しても微妙に意味のずれが生じるような、ある文化特有の語彙を普遍的な mini-English のような言語 (Natural Semantic Metalanguage: 以下NSMと表記) によってパラフレーズし、説明できると考えた。本研究では日本語の「嘘」という語を英語のlieと比較し、厳密には対応しないことを示しながら、NSMによりその意味構造を明らかにする。

Wierzbickaによる英語のlieのNSMでの分析は次のとおりである。

X lied to Y.=

X said something to Y

X knew it was not true

X said it because X wanted Y to think it was true

[people would say: if someone does this, it is bad]

(Wierzbicka 1996: 152)

日本語で lie に対応するとされる「嘘」の意味範囲は広く、冗談のような軽い意味や言い間違いの意味などがあり、lie のように必ずしも悪いニュアンスを持つとは言えない。本研究では日本語の「嘘」を Wierzbicka の手法を用いて分析したい。

研究方法は文学作品などから原典と対訳のデータを収集し比較するパラレル・コーパスの手法を用いる。

派生名詞句の内部構造について

東北大学大学院 佐藤 亮 輔

従来、派生名詞句は、相を修飾する語句の生起の可否、意味の合成性などの違いに基づき、内項を持つものと内項を持たないものの2つのタイプに分けられ、前者はより動詞句に近い構造を持ち、後者はより非派生名詞句に近い構造を持つと考えられてきた。本発表では、派生名詞句はタイプにかかわらず、内項のみを持ち外項を欠いた同一の構造を持つと主張する。先行研究で観察されてきたそれぞれの名詞句の特徴はすべて、構造の相違ではなく、内項が顕在的か非顕在的かによって説明される。さらに、本論の分析に基づくと、非能格動詞は名詞化できないという事実や、二重目的語受益者構文は名詞化できない等々のこれまであまり議論されることのなかった事実に対しても原理的な説明を与えることができる。

<第二日>

11月8日(日)10時

SYMPOSLA

第一部門 (C407)

英文学と英語・文化・文学教育を考える

司会・講師	宮城教育大学准教授	竹 森 徹 士
講師	仙台高等専門学校教授	久保田 佳 克
講師	秋田大学准教授	大 西 洋 一
講師	東北大学教授	大河内 昌

英文学を専攻した者だからこそできる教育はあるだろうか。教育現場において英文学はどんな役割を果たしてきたのか、そして今後果たすべき役割とは何だろうか。

本シンポジウムでは、英文学と教育の現在についてあらためて考えてみたい。今回は広く英語、文化、文学をキーワードに、様々な教育現場における現状を探る。各講師は、実践報告や現状分析をもとに、それぞれの立場、視点から考察、問題提起を行なう。それらの議論を通して、英文学が教育において寄与すべき方向性を明らかにしたい。

初等・中等教育における英語教育の現状と英文学

久保田 佳 克

急速にグローバル化が進む産業界の要請により、21世紀日本の学校英語教育は大きく様変わりしてきている。『『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想』(2002)に始まり、国民全体が「使える英語」=『『コミュニケーションの手段』としての英語』を身につけるための学校英語教育の改革が文部科学省主導で行われてきた。中学校・高等学校の英語の授業は従来の文法訳読方式の授業から、「聞く・話す・読む・書く」(「読む・書く・聞く・話す」ではなく)の四技能のバランスを考えた授業形式に変わってきている。日本の英語教育が変わらない一つの大きな理由とされてきた大学入試も、アカデミック英語能力判定試験 (TEAP) の導入で今後変わることが予想される。こうした流れの中で、理工系の教育機関である高等専門学校(高専)ではどのような英語教育が行われているか、また筆者の英文学のバックグラウンドがどのように活かされているかを報告する。

グレイディッド・リーダーズを用いた英語・文学教育

竹 森 徹 士

多読教育への関心の高まりとともに、その主な教材であるグレイディッド・リーダーズが脚光を浴びている。シリーズによっては古典的な文学作品から現代的な映画化作品まで様々な作品が入り混じっており、物語を選ぶ楽しさ、自力で英語の物語を読み切る楽しさを学生に味わってもらうには適当な教材であり、文学畑の教員には比較的取扱いやすい教材だと思われる。

本発表は、発表者がグレイディッド・リーダーズを教材に試みた授業の報告と考察である。総読書語数という数値で読書量を明確化するのが多読教育の長所である。一方、そうした読書量を中心にした指導では、個々の作品の個性や作品を読む楽しみが蔑にされ、読書の質が損なわれてしまう。そうした質的な側面から読書指導を補完するのが、文学教育を背景に持つ教員の役割であろう。

文化と文学の接点を探して——英国表象文化に関する教育実践報告

大 西 洋 一

2006年に開催された東北英文学会のシンポジウム「今、〈文学〉を教えるということ」では、「“Land of 'ope and Bloody Glory, eh?”—北イングランド文化を教えるために—」と題して、英国文化を教える際の試行錯誤について報告した。それから約10年、相も変わらず英国文化について、演劇、映画、音楽、絵画、都市、地域などを主要トピックとして授業を展開している。学生自身が手の届くところにある「英国」の文化について、十分な「リテラシー」を持ってもらうことがその目的であるとひとまずは言えよう。このように英国文化を教えながら、常に苦心してきたのは英語文学あるいは英語文献との接点である。所属学部の改組に伴い、主たる対象が「英語教育専攻」から「国際言語文化課程」、そして現在は「地域文化学科」の学生へと変わったことを踏まえて自身の教育実践がどのように変化したかも紹介しながら、英国表象文化を教える日頃の現場での暗中模索について報告したい。

英文学と英語教育

大河内 昌

かつて、英文科出身の学生・大学院生の多くは、中学校や高等学校や大学の英語教員になっていた。英文学を学んだ者が英語教師になることになんの不思議もなかった。大学で受けた英文学の専門教育が、英語の教育現場で役に立つと信じられていた。しかし、近年、英文学出身者が英語を教えることが当然と見なされなくなっているような気がする。もしそうなら、かつて一体と考えられてきた「英文学の素養」と「英語教師としての資質」との間に乖離が生まれたということなのだろうか？ 今回の発表では、『新々英文解釈研究』（研究社）、『英文標準問題精講』（旺文社）、『和文英訳の修業』（文建書房）といった往年の学習参考書の名著を出発点として、英語教育と英文学が一体であった時代の英語教育の目標は何だったのかを考察し、その目標がどう変化したのか、英文学と英語教育に乖離をもたらしたものはなにか、といった問題を考える。

第二部門 (C405)

ヒッピー世代の諸先輩——Thoreau, Hemingway, Miller

司会	秋田大学教授	村 上 東
講師	大東文化大学教授	中 垣 恒太郎
講師	共愛学園前橋国際大学教授	大 森 昭 生
講師	東北学院大学准教授	井 出 達 郎

1960年代から、それ以前の文学者を考えてゆく企画である。まず、Hawthorne が Charles Brockden Brown を先達として仰いだ (“The Hall of Fantasy”) ことと同様の、自他ともに認めるような連続性はあるのだろうか。King 牧師などが讃えた Thoreau の場合、公民権運動とベトナム反戦で読み直されたことは広く知られた事実だ。では、19世紀当時の受けとめられ方と60年代とでは相違はなかったか。こうしたことも改めて振り返る機会としたい。

Hemingway は逆の例と言えるかも知れない。*Nick Adams Stories* (1972) を皮切りに新たな読みの可能性が次々と示唆される時代が30年ほど続くが、対抗文化華やかなりし頃は過去の遺物扱いに近かった。では、60年代に繋がるものを Hemingway が持たなかったことの証しなのだろうか。いや、ピューリタン文化に対する拒否反応ひとつをとっても、立派な先輩であろう。

60年代の寵児としても大過ない Henry Miller については上記二者とは異なった捉え方が必要かも知れない。浮世の価値観から超絶していた Miller と金儲け主義やぎすぎすしたピューリタン文化に反発した時代の流れとは相通ずるものがあつた。だが、ピューリタンの性から抜け出ようとした60年代の「エロスの人間」たちと *Tropic of Cancer* (1934) などで描かれる性の世界はあまりにもかけ離れている。この点だけをみても、寵児すなわち代表選手とはできない。

講師3名の発表に先立ち、ビート文学者とヒッピー世代の相違点をかいつまんで確認しておくことで露払いとしたい。(村上記す)

大衆文化におけるソロー像の変遷 ——哲学者・詩人としての「ホーボー」像の再創造

中 垣 恒太郎

Sean Penn 監督による映画『イントゥ・ザ・ワイルド』(*Into the Wild*, 2007) は、裕福で恵まれた家庭に育った主人公クリスが大学での学業生活を放棄し、世界の真理を求めてアラスカへと旅に出る物語である。カリフォルニアのアウトサイダーが集うコミュニティなどで親の世代となるヒッピーのカップルに出会う。クリスは人生の指針をソローに求めており、ソローの言葉を折に触れて引用している (“[...] rather than love, than money, than faith, than fame, than fairness [...] give me truth. [...]).)。ある意味でソローの思想を現代において体现しようとする可能性を追求した物語であり、『イントゥ・ザ・ワイルド』は現在のソロー思想およびヒッピー受容を考察する上で格好の素材となる。

本報告では、1960年代に対抗文化の時代精神の高まりの中でソロー像がどのように再創造／変容されていったのかを軸に、大衆文化における文化的アイコンとしてのソロー像の変遷を辿る。中でもソローの時代からヒッピーの登場期までを「ホーボー」像の変遷を通して幅広く探ってみたい。社会現象としてのホーボーが消滅していくのと前後するように、あたかも哲学者・詩人としての趣を持つかのような新たなホーボー像が創造されていく過程に注目する。「ホーボー」とはもともととは

労働を伴う「渡り労働者」を指す存在であったが、この新たなホーボー像の造型にはソローの思想を摂取した形で発展を遂げたヒッピー像が投影されていると言えるのではない。

忘れられていた先輩——60年代にとっての Hemingway

大 森 昭 生

「壁に掛けられない絵」。Gertrude Stein は Hemingway の “Up in Michigan” (1923) についてこう評した。*The Sun Also Rises* (1924) を読んだ母 Grace は、「今年の最も不潔な本」というオークパークの読書クラブ評と共に「どのページも嫌悪感で胸が悪くなる」という感想を息子に送った。Hemingway は、この時点で、前時代のハイカルチャーヘカウンターを打ち、第一次世界大戦後の若者文化の旗手であったはずだ。彼の技法は新しさに満ち、『エデンの園』を待つまでもなく彼の描くセクシュアリティはお上品な伝統を「逸脱」し、彼が報告する戦争は一人一人の兵士や民衆の悲劇を見つめている。

しかし、60年代は彼をそのようには受け入れなかった。本来、彼は対抗文化の先輩として参照されるべきではなかった。

人々は、いつしか彼を “Papa Hemingway” と呼ぶようになる。皆にとってのパパは「憧れの男」でなければいけない。釣、狩猟、ボクシング、彼のスポーツは男のそれであり、飛行機事故に遭っても不死身の身体をメディアに見せつけ、勇敢に戦場に赴き、ファシズムを打破しなければならなかった。そして、彼は今や「セレブ」になっていた。対抗文化がメインストリームとなり、若者文化が大人の嗜みになるように。

60年代と Hemingway との距離は、「反戦作家」・「多様な性の描き手」と「パパ」・「セレブリティ」の間の距離を測ることで見えてこないだろうか。

対抗としての “happiness”——流れるものの肯定との関連から

井 出 達 郎

Tropic of Cancer (1934) の中の “I am the happiest man alive” という語り手の台詞にあるように、Henry Miller の作品では、「幸福 (happiness)」という状態が決定的な啓示のようにはっきりと描かれる場面が少なくない。ミラーに特有なのは、それがあらかじめ設定された何かに到達した状態といったものではなく、その語源が孕む「偶然 (hap)」という意味を色濃く帯びながら、動き続ける今そこにある自己、流れの只中にある自己をどこまでも肯定することを意味している点にある。

本発表は、ミラーに特有のこの「幸福」が、ミラーの作品群で繰り返し描かれる流れるものの肯定と結びつきながら、単なる抽象的な幸福論といったものにとどまらず、「幸福の追求」を根源的な理念とした国家への対抗言説としても解釈できること、そして、その意味で続くヒッピー世代へのまさに流れをつくったものであることを論じたい。作品としては *Tropic of Cancer* と *The Air-Conditioned Nightmare* (1945) を取り上げ、表面上の政治的な調子の違いを越え、両者がともに幸福としての流れるものの肯定を、ひとつの対抗言説として描いていることを読みとっていく。その対抗としての幸福から、ミラーとヒッピー世代との関係を改めて検討していきたい。

第三部門 (C402)

言語計算の効率性を巡って

司会・講師	東京理科大学講師	北 田 伸 一
講師	東京理科大学准教授	小 畑 美 貴
講師	北見工業大学准教授	戸 澤 隆 広
講師	北海道教育大学旭川校准教授	菅 野 悟
講師	福島大学講師	佐 藤 元 樹

本シンポジウムにおいては、極小主義プログラムの枠組みで、人間言語の計算システムに関わる効率性について考察する。Chomsky (1995) *The Minimalist Program*以降の言語計算システムでは、統語構造は併合(Merge)操作によって構築され、ある一定の派生段階に達すると、その統語構造が意味解釈に関与する概念・意図(Conceptual-Intentional)システムと音声解釈に関与する調音・知覚(Articulatory-Perceptual)システムの各インターフェースレベルに送られて解釈を受ける。この計算システムにおける併合操作の効率性および統語部門と他の部門との効率的なインターフェース理論について議論することが本シンポジウムの目的である。

併合操作に関しては、Chomsky (2013) “Problems of Projection”ならびに Chomsky (2014) “Problems of Projection: Extensions”が、ラベル(labeling)は併合操作とは独立した概念であると主張した。このラベルについての理論的妥当性(小畑講師)および経験的妥当性(戸澤講師・菅野講師)を検討する。また、統語部門と他の部門との効率的なインターフェースに関しては、音韻論とのインターフェース(佐藤講師)および形態論とのインターフェース(北田講師)について検討を加える。

ラベル付けと主文現象

小 畑 美 貴

Chomsky (1995) 以降、併合(Merge)によって形成された集合 $\{\alpha, \beta\}$ へ対するラベル付けの問題が盛んに議論されている。特に、ラベルがどのような役割を担い、派生のどの段階で、どのような演算によって付与されるのかという点に関しては、依然として議論の余地が残っている。本発表では、Cecchetto and Donati (2015) による「ラベル付けは統語部門(narrow syntax)内で、探査子(probe)として働く素性によって行われ、ラベルは更なる併合操作の適用を駆動することが出来る」とするシステムを検証する。この説を推し進めると、「主節CPにはそれ以上併合操作が適用されない為、ラベルを必要としない」よって「探査を伴わない移動が許されるのは、ラベル付けの必要のない主節に限定される」という帰結が得られる。その裏付けとして日本語右方移動がなぜ主文現象なのかを説明している。この主張に対し、本発表ではObata (2009, 2010)に基づき、日本語右方移動は「探査を伴う移動」である可能性を示し、上記システムのもとでは、日本語(左方)かきまぜ操作が、中間CPを最終着地点とすることが可能である点を説明困難であることを指摘する。これらの問題は、Chomsky (2013) によるラベル付けアルゴリズムのもとで説明可能であることを示し、提案の分析から得られる理論的・経験的帰結を明らかにする。

英語の縮約関係節構文と比較構文について

戸 澤 隆 広

近年の極小主義では、構成素のラベル決定の仕組みに焦点が置かれている。Donati (2006) は移動要素が語彙項目の場合のみ、移動先でラベルになれるとし、句範疇は移動先でラベルになれないと主張している。Chomsky (2008, 2013) は Donati の知見に従い、最小探索に基づくラベル決定のアルゴリズムを提案し、句範疇は移動先でラベルになれないとしている。本発表では Chomsky のラベル決定に関する理論を発展させる。すなわち、フェイズという概念が構成素のラベル決定に重要な役割を果たすと考え、句範疇であってもそれがフェイズで、指定部を含まない限り、移動先でラベルになれると主張する。この主張に基づき、英語における縮約関係節構文と比較構文の主要部繰り上げ分析を提案することで、両構文を統一的に扱うことを試みる。縮約関係節構文は、名詞句が-ing節内から移動し、移動先でラベルになることで派生すると分析する。比較構文は形容詞句または名詞句が than/as 節内から移動し、移動先でラベルになることで派生する。この分析に基づき、両構文の様々な統語的共通特性に原理的説明を与える。

外項の統語位置に関して

菅 野 悟

本発表では、Chomsky (2013, 2014) に基づき、主語の統語位置を分析し、[Spec, TP] に基底生成する可能性を追求する。さらに、その理論的帰結を検証する。Chomsky (2013, 2014) では、主語は [Spec, ν P] に基底生成されるが、ラベル (label) が決定できないため、上位へ移動することが主張されている。一方、同論文では、併合 (merge) の自由適用が主張されている。この併合の自由適用の理論的可能性として、外項が [Spec, ν P] に基底生成するのではなく、[Spec, TP] に基底生成する可能性が生じる。本発表では、この妥当性を検証し、さらに、この帰結として、D 構造という理論的構築物を破棄できることを見る。Chomsky (1995) 以来、D 構造が果たしていた役割がインターフェイスなどに振り分けられてきたが、主題役割の付与 (θ -role assignment) は依然として、従来の D 構造、及び、それに類似した構造が想定され続けている。しかし、外項の [Spec, TP] への基底生成の考えにより、D 構造を破棄することが出来る。さらに、A 移動は痕跡を残さないという主張に理論的な根拠を提示することが出来ると主張する。

省略現象における削除操作と削除の適用条件について

佐 藤 元 樹

省略現象は、節や句が音あるいは文字で表されないにもかかわらず、その意味が解釈される現象である。この現象は言語のインターフェース研究に重点を置く生成文法の極小主義プログラムにおいて盛んに研究されている分野であり、Merchant (2001) の研究以降、省略箇所の統語的内部構造の存在が明らかにされてきている。省略箇所の統語構造が明らかになるにつれて、省略文の空所が音韻部門における削除操作 (PF 削除) によって派生されるという見方が強まってきている。

本発表では、PF 削除分析を支持する更なる経験的根拠を、be 動詞が残留した省略文から示し、削除操作が適用される領域と削除操作に課せられる形態・統語的同一性条件について議論する。さらに、同じく be 動詞が残留する省略文であっても、等位節と比較節では、省略箇所の容認可能性について対比があることを論じ、削除操作が適用される統語レベルとその認可条件について、派生と表示の経済性の観点から検討する。

分散形態論における got の随意性

北 田 伸 一

本発表では、分散形態論 (Distributed Morphology) の枠組みで、(1) に観察される got の随意性 (optionality) について論じる (cf. LeSourd, Philip. 1976. *Got* insertion, *LI* 7: 509-516.)。

(1) John has (got) a blue car.

(1) における got の統語分布は、アメリカ英語とイギリス英語において異なる。たとえば、(2a) と (2b) の対比が示すように、アメリカ英語では have が文頭へ主要部移動する時、got は義務的に生起しなければならないのに対して、イギリス英語では have が文頭へ移動する時、got は随意的に生起できる。

(2) a. Has John *(got) a blue car? (American English)

b. Has John (got) a blue car? (British English)

このアメリカ英語とイギリス英語の間に観察される got の随意性の差異が、動詞の語彙分解 (lexical decomposition) と主要部移動の差異に還元されると主張する (cf. Hale, Kenneth and Samuel Jay Keyser. 1993. On argument structure and the lexical expression of syntactic relations, *The view from building 20*, 53-109.)。

大会会場 (宮城学院女子大学 講義館) へのアクセス

<バスご利用の場合>

□仙台駅から

A: 西口バスプール3番 「宮城学院前」行乗車→「宮城学院前」下車。

B: 西口バスプール2番 「宮城大学・仙台保健福祉専門学校前」行乗車→「宮城学院前」下車。

【所要時間: 約30分・料金350円】

□地下鉄旭ヶ丘駅から

3番バス停 「東勝山団地経由宮城学院前行」乗車→「宮城学院前」下車。

【所要時間: 約10分・料金230円】

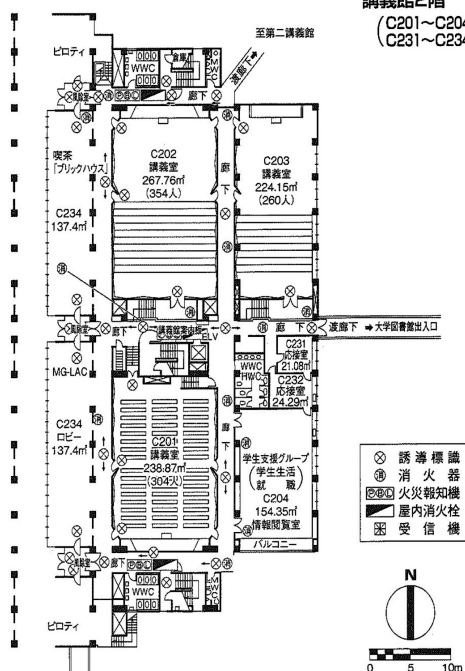
□地下鉄八乙女駅から

2番バス停「北環状線経由長命ヶ丘団地」線乗車→「上谷刈山添」下車。

【所要時間: バス約9分+徒歩7分・料金230円】



講義館2階
(C201~C204)
(C231~C234)



講義館4階 (C401~C411)
(C431~C434)

